

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第15号

《研究ノート》

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和

南さつま市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

岩川官軍基地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の基地の配置—

湯場崎 辰巳

令和3年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2023. 3

『縄文の森から』第15号 目次

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広・・・・・・・・ 3

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和・・・・・・・・ 19

南さつま市松木菌遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏝について

川口 雅之・・・・・・・・ 29

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文・・・・・・・・ 33

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 43

令和3年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相 —中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和

Aspects of pottery from Latter half of the late Jomon Period on the Osumi peninsula with
a focus on Nakadake pottery

Yamato Miyazaki

要旨

本稿では、大隅半島の遺跡から出土した中岳Ⅱ式土器を対象とし、口縁部形態から分類を行い形態変化の検討を行った。検討の結果、中岳Ⅱ式は肥厚した口縁部に2条の凹線をもつものだけでなく、肥厚しないものや無文のものなどのバリエーションがあり、その組み合わせに時期差がみられた。

キーワード 中岳Ⅱ式土器、縄文後期後葉

1 はじめに

近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、大隅地域の縄文時代の調査成果が多く上がっており、資料も増加している。

1980年に型式設定された中岳Ⅱ式土器は近年良好な資料が増加しているが、研究例が少なく未解明な点が多い型式である。近年の資料では、中岳Ⅱ式土器の中でも、従来型式設定されているものに該当しない異なる特徴をもつものが散見されており、従来の研究成果では中岳Ⅱ式土器をすべて把握することが難しい現状にある。

そこで、本論では中岳Ⅱ式土器を中心として、その同伴関係や型式変化、バリエーション等について再検討を行い、縄文時代後期後葉の土器の様相を示す一端とした。

2 研究史

中岳Ⅱ式土器は、曾於市末吉町南之郷中岳に所在する中岳洞穴を標式遺跡とする。中岳洞穴は、昭和53年(1978)～昭和54年(1979)にかけて、河口貞徳らによって調査された。河口は新発見の深鉢形土器を1～4類に分類した(河口1980)。その中の2類が現在の中岳

Ⅱ式に該当する。その特徴は以下のとおりである。

- ・胴部から頸部へ「く」の字状に屈曲して内湾し、再び口縁部へ外反する器形をもつ。

- ・口縁が屈曲して立ち上がり、肥厚し、口唇部は平坦面をつくる。

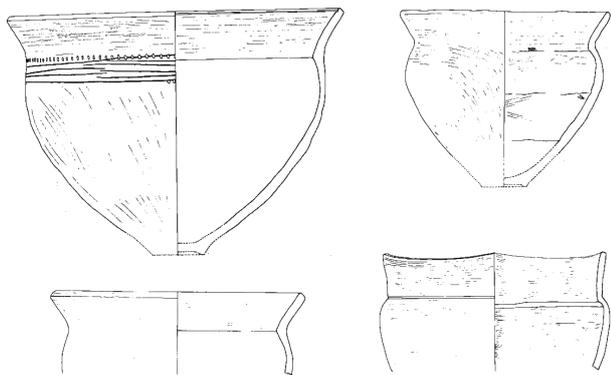
- ・口縁部側面および肩部に2条の凹線を施す。

河口は、1類は西平式の深鉢形の器形・文様(口縁部文様帯と磨消縄文)が簡略化したものであるとし、中岳1類(中岳Ⅰ式)から中岳2類(中岳Ⅱ式)への変遷を考え、西平式土器から三万田式土器への移行過程を示すものであるとした。この時点で中岳Ⅱ式は三万田式土器の直前に位置づけられた。(第1図)

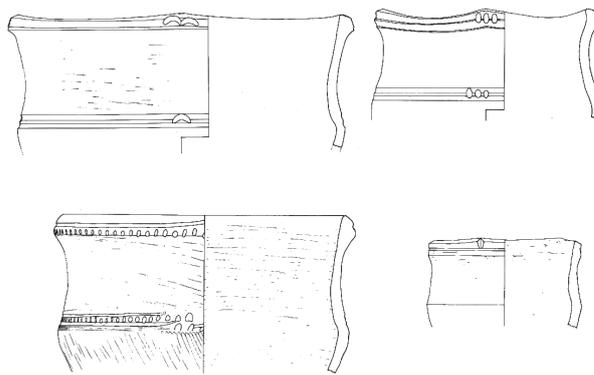
日高孝治は、中岳Ⅱ式土器を中村遺跡(宮崎県山田町)の報告書内で「御領式土器の系譜を引くものであろう」とし、「時期的には晩期初頭」に位置づけている(日高1983)。

北郷泰道は、平畑遺跡(宮崎県宮崎市)の報告書の中で、縄文晩期に位置づけた竪穴住居から出土した中岳Ⅱ式土器について「後期からの伝統を強くうけるこの一連の土器群」と表現し、後期末から晩期前葉に位置づけている(北郷1985)。また、菅付和樹は、同報告書内にお

1 類土器



2 類土器

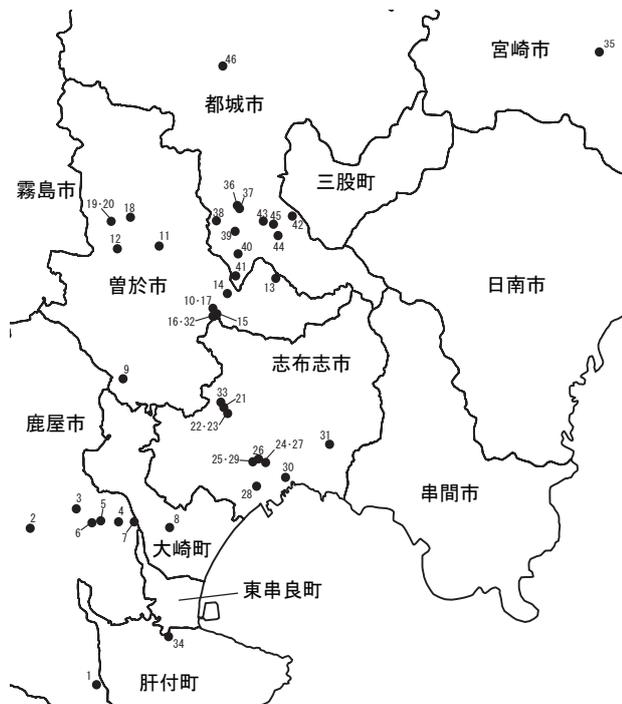


第1図 中岳洞穴出土土器

いて包含層から出土した中岳Ⅱ式土器について「御領式土器の系統を引き晩期初頭」に位置づけたが、口縁部内面が凹むものについては三万田式・御領式に併行するという案を提示している（菅付1985）。

栗畑光博は、鹿児島県及び宮崎県内8遺跡出土の中岳Ⅱ式土器を対象として、口縁部形態を6種類、胴部形態2種類に分類し、その相関関係から1～5の器形群に分類した（栗畑1989）。中村遺跡の包含層出土土器の出土層位関係から、口縁内面に段をもつものを段が緩やかになるものよりも古く位置づけた。そして新たに中岳Ⅱ-1型式・中岳Ⅱ-2型式・中岳Ⅱ-3型式を設定し、中岳Ⅱ-1型式（1群）→中岳Ⅱ-2型式（2群）→中岳Ⅱ-3型式（3群）と変遷するとした。4群はⅡ-2型式の空間的亜型式、5群はⅡ-3型式以降と位置付けた。口縁部内側の段が明瞭なものから無段へと変化し、それに伴い胴部の張り出しも強いものから弱くなっていく。文様もそれに対応し、凹線文から沈線文へ変化する。この文様変化が凹線文系三万田式から御領式への変化と対応するとして、中岳Ⅱ式土器は三万田式と御領式に併行する可能性が高いと指摘している。また、中岳Ⅱ式は深鉢形のみであり、凹線文系三万田式や御領式の浅鉢・鉢形土器とセットになる可能性にも言及している。

中村耕治は、町田堀遺跡（鹿児島県鹿屋市）の報告書の中で、同遺跡から出土した中岳Ⅱ式を口縁形態から深鉢A～F、浅鉢G～Iに分類した。それを栗畑の分類に当てはめ、A類が中岳Ⅱ-1型式に、B・C・D類が中岳Ⅱ-2型式に、E類が中岳Ⅱ-3型式にそれぞれ該当するとした（中村2016）。



第2図 中岳Ⅱ式出土遺跡分布図

幸泉満夫は中岳Ⅱ式とその後継の土器群を「中岳系土器群」と呼称し、器形・口縁部の断面形状・肩部（頸胴屈曲部）の形状・文様から深鉢の属性分類を行った。そして新たな編年案として、中岳系Ⅰ期：中岳系竹ノ内式段階→中岳系Ⅱ期：中岳系東田式段階→中岳系Ⅲ期：中岳系町田堀式段階→中岳系Ⅳ期：中岳系水の谷式段階→中岳系Ⅴ期：中岳系布平式段階を示した。口縁部の断面形状からⅠ期は外面に密な併行凹線を二条施すβ①形が主流であり、Ⅱ期で凹線が沈線化したβ②・③形へ変化し、Ⅲ期で口縁部が拳上に肥厚するβ④ab形が登場し、Ⅳ期では1条沈線の特徴とするβ⑥形となるとしている。Ⅰ期は中岳系成立期、Ⅲ期は中岳系最盛期、Ⅳ期は中岳系崩壊期、Ⅴ期は中岳系終焉期としている。中岳系土器に特徴的な、2センチほどの極小な接地面を有する底部を「中岳型底部」と呼称し、Ⅲ期によく見られるとしている。また、無刻突帯文系土器の源流が中岳系土器群にあるとした。

3 問題の所在と研究の目的

先行研究を概観してみると、中岳Ⅱ式の編年的位置づけは、①三万田式直前、②三万田式～御領式併行、③御領式以降と研究者によって異なっている。また年代観についても、①縄文時代後期末～晩期初頭、②縄文時代後期後葉、③縄文時代晩期初頭と定まっていない。

器形や文様については栗畑（栗畑1989）及び幸泉（幸泉2021）によって検討が行われているが、中岳Ⅱ式と同じ器形の無文の個体についての検討はなされていない。同器形の無文個体は、中岳式の標式遺跡の中岳洞穴から

第1表 中岳Ⅱ式出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺構
1	中尾	鹿屋市吾平町上名中尾	
2	水の谷	鹿屋市七蔵川町水の谷	
3	十三塚	鹿屋市串良町細山田十三塚	
4	町田堀	鹿屋市串良町細山田	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑
5	牧山	鹿屋市串良町細山田	
6	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田	
7	細山田段	鹿屋市串良町・曾於郡大崎町	
8	永吉天神段	曾於郡大崎町永吉天神	
9	宮ヶ原	曾於市太陽町大谷宮ヶ原	
10	牧B	曾於市未吉町岩崎牧	竪穴建物跡
11	中尾段	曾於市未吉町胡摩地内	
12	関山	曾於市未吉町諏訪方関山	
13	中岳洞穴	曾於市未吉町南之郷市林	
14	平松城跡	曾於市未吉町南之郷陣之山	
15	土合原	曾於市未吉町南之郷土合原	
16	西原	曾於市未吉町南之郷西原	竪穴建物跡
17	原村	曾於市未吉町南之郷原村	竪穴建物跡
18	田平下	曾於市財部町下財部字田平下	
19	九義岡	曾於市財部町南俣九義岡	
20	財部城ヶ尾	曾於市財部町南俣	
21	松ヶ尾	志布志市有明町伊崎田松ヶ尾、若ヶ谷	
22	山ノ口	志布志市有明町伊崎田山ノ口	
23	下原	志布志市有明町伊崎田	竪穴建物跡
24	高直B	志布志市志布志町安楽宇都上	
25	炭床	志布志市志布志町安楽炭床	
26	船迫迫	志布志市志布志町安楽中島	
27	船迫	志布志市志布志町安楽船迫	
28	安島	志布志市志布志町安楽勢園	
29	山角B	志布志市志布志町安楽山角	
30	見婦	志布志市志布志町志布志	溝状遺構
31	家野	志布志市志布志町帖字家野	
32	牧ノ原B	志布志市松山町新橋	
33	蔵野B	志布志市松山町	
34	東田	肝属郡肝付町野崎東田	竪穴建物跡
35	平畑	宮崎市学園木花台西	竪穴建物跡
36	大岩田村ノ前	都城市大岩田町5449ほか	
37	黒土	都城市大岩田町5597ほか	
38	上針谷ノ下針谷	都城市今町8917	
39	鎌ヶ崎	都城市梅北町	
40	塚坂	都城市梅北町9723番地1号ほか	竪穴建物跡
41	大浦	都城市梅北町10792番地2号ほか	竪穴建物跡
42	豊満大谷	都城市豊満町宇大谷	
43	王子原第2	都城市姫城町6-21	
44	野添	都城市安久町宇前畑	竪穴建物跡
45	王子原ノ上安久	都城市安久町	
46	中村	都城市山田町山田	

も出土しており、その関係性についても明らかにする必要があります。

中岳Ⅱ式の器種構成については深鉢と浅鉢が確認されているが、一括資料の少なさから全体像の把握が不十分である。中岳Ⅱ式と中九州土器との関係については柴畑（柴畑1989）によって触れられているが、中岳Ⅱ式に併行すると考えられる上加世田式との比較は行われていない。中岳Ⅱ式に後続するとされる入佐式についても、中岳Ⅱ式からの型式変化の様相が分かっていない。

中岳Ⅱ式については、編年的位置づけや年代観、器種構成、他地域との比較などまだ未解明な部分が多い現状にある。このことから本論では、中岳Ⅱ式土器について型式学的な再検討を行い、型式変化やバリエーションといった様相の解明を試みる。

4 研究の方法と対象資料

(1) 研究の方法

鹿児島および宮崎県南部出土の中岳Ⅱ式土器の集成を行い、良好な遺構一括資料を中心に検討対象とする。対象資料を分類し、形態の変化について検討を行う。また、一括資料のセット関係の変化についても検討を行う。

(2) 対象資料

集成を行った結果、鹿児島県及び宮崎県内の中岳Ⅱ式出土遺跡は、鹿児島県31遺跡、宮崎県12遺跡の計43遺跡である（第2図・第1表）。

(3) 型式分類（第3図）

柴畑（柴畑1989）は口縁部形態を6種類、胴部形態を2種類に分類した。幸泉（幸泉2021）は口縁部形態を17種類、胴部形態を6種類に分類した。両者とも口縁部内側に段を有するものが胴部が張り出すものに対応し、口縁部に段を持たないものが胴部が張り出さないものに対応するとし、前者から後者へ移行していくことを指摘した。両分類とも口縁部に凹線または沈線を施したものを対象としている。そのため本論では口縁部形態を、口縁部に凹線または沈線を施すもの2種類と無文のもの1種類に大別し、その後細分をおこなった。

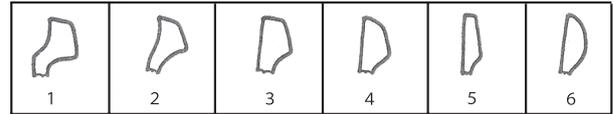
深鉢A：2条の凹線又は沈線を施した口縁部が内傾または直口するタイプ

A-1：口縁部が内傾または直口し、口縁内面に明瞭な段をもつ。頸部の屈曲が強く、肩部が強く張り出し明瞭な稜をもつものが多い。文様は凹線または沈線である。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

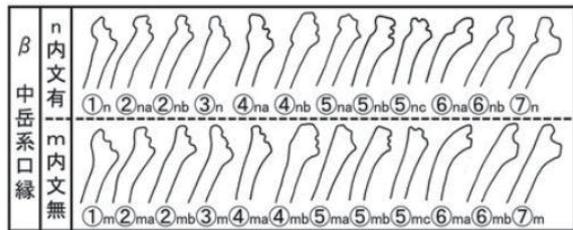
A-2：口縁部が直口し、口縁内面に段をもつ。頸部がやや屈曲し、肩部もやや張り出す。文様は凹線・沈線に加え、凹点文・連続凹点文が施されるものもある。波状口縁のものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施されるものや、内面はナデ調整のものがある。

A-3：口縁部が直行し、口縁内面に浅い段をもち、

柴畑による口縁部形態分類（柴畑 1989 より一部転載）



幸泉による口縁部形態分類（幸泉 2021 より一部転載）



本稿での口縁部形態分類



第3図 口縁形態分類図

三角形に肥厚する。頸部がやや屈曲し、肩部もやや張り出す。文様は凹線・沈線に加え、三日月文が施されるものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施されるものや、内面のみナデ調整が施されるものもある。

深鉢B：2条の凹線又は沈線を施した口縁部が外反するタイプ

B-1：口縁部が外反し、口縁内面に緩やかな段をもつ。頸部はほとんど屈曲せず、肩部の張り出しも弱い。文様は凹線文である。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

B-2：口縁部が外反し、口縁内面に段をもたず、三角形に肥厚する。頸部はほとんど屈曲せず、肩部の張り出しも弱い。文様は沈線に加え、凹点や三日月文を施すものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

B-3：口縁部が外反し、口縁内面に段をもたず、丸みを帯びて肥厚する。頸部はほとんど屈曲せず、肩部の張り出しも弱い。文様は沈線に加え、連続凹点文・三日月文が施されるものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

深鉢C：無文の口縁部が外反するタイプ。頸部がやや屈曲し、肩部が張り出すものもある。調整は丁寧なミガキが施されるものや粗雑なナデ調整が施されるものがある。

5 結果

(1) 各遺跡の相伴関係（第4～6図・第2表）

各遺跡の主な一括資料について、以下に記す。なお、報告書内で竪穴住居跡として紹介されているものは、その機能が断定できないため今回は竪穴建物跡として表現を統一している。

① 牧B遺跡

1号竪穴建物跡（第4図1～15）

深鉢A-1（第4図1）、深鉢A-2（第4図2）、深鉢B-1（第4図5～8）、深鉢C（第4図7～10）、浅鉢（第4図13～15）が出土する。主体となるのは深鉢B-1である。口縁文様帯が広く、器形が鳥井原式と似る土器（第4図1）や、三万田式でみられるような無文で波状口縁の土器（第4図10）を確認できる。文様は凹線が主体であり、凹点を加えるものもある。底部は平底（第4図11～12）である。浅鉢は器壁が厚いものが目立つ。そのほかの共伴遺物は磨製石斧、磨石、敲石、軽石である。

②原村遺跡

3号竪穴建物跡（第4図16～21）

深鉢A-1（第4図16）、深鉢A-2（第4図17～20）が出土する。主体となるのは深鉢A-2である。文様は凹線が主体であり、凹点を加えるものもある。底部は平底（第4図21）である。そのほかの共伴遺物は打製石鏃である。

4号竪穴建物跡（第4図22～29）

深鉢A-1（第4図22）、深鉢A-2（第4図5～8）が出土する。主体となるのは深鉢A-2である。22は文様帯が長く、内側に強く屈曲する。文様は凹線が主体であり、凹点を加えるものもある。底部は小平底である。そのほかの共伴遺物は磨石である。

③町田堀遺跡

町田堀1-1号竪穴建物跡（第5図30～41）

深鉢A-2（第5図30～32）、深鉢A-3（第5図33～35）、深鉢B-2（第5図36）、深鉢C（第4図37）、浅鉢（第5図40～41）と多様なバリエーションが出土する。A-2では波状口縁のものが目立つ。文様は沈線が主体であり、凹点文・連続凹点文・三日月文を加えるものもある。底部は小平底から尖底（第5図38～39）である。そのほかの共伴遺物は打製石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨敲石、石皿である。

④下原遺跡

1号竪穴建物跡（第5図42～46）

深鉢B-2（第5図42～43）、深鉢C（第5図44）が出土する。主体となるのは深鉢B-2である。文様は沈線が主体であり、三日月文を施すものもある。底部は小平底から尖底（第5図45～46）である。そのほかの共伴遺物は打製石鏃、打製石斧である。

⑤野添遺跡

1号竪穴建物跡（第5図47～52）

深鉢B-3（第5図47～50）のみが出土する。文様は沈線が主体であり、凹点文・連続凹点文を施すものもある。底部は尖底（第5図51～52）である。そのほかの共伴遺物はスクレイパーである。

⑥嫁坂遺跡

8号竪穴建物跡（第6図53～60）

深鉢C（第6図58）が、入佐式と推定される土器とともに出土する。そのほかの共伴遺物は円盤形土製品、スクレイパー、有溝砥石である。

（2）各分類からみる共伴関係（第2表）

各遺跡の共伴関係から分類を検討すると、以下のことが確認できる。

口縁部が強く屈曲し、肩部も強く張り出す深鉢A-1は、口縁部が肥厚しないタイプ（A-2・B-1）と共伴することが多い。牧B遺跡では深鉢A-1と共に三万田式のような波状口縁をもつ無文の土器も出土しており、この無文土器は牧B遺跡のみで確認できる。町田堀遺跡では、口縁部が肥厚するものと肥厚しないものが混在し、深鉢A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、C、浅鉢といった多様なバリエーションが共伴する。下原遺跡、西原遺跡、嫁坂遺跡などでは、口縁部が肥厚した深鉢B-2が主体となり、深鉢Cが共伴することもあるが、浅鉢は共伴しない。野添遺跡では深鉢B-3のみ出土し、深鉢Cも浅鉢も共伴せず、他の遺跡とは異なる様相を示す。

以上の結果から、各分類の共伴関係が下記の3つのグループに分かれることが明らかとなった。

グループ1：深鉢A-1、A-2、B-1、C、浅鉢（牧B～町田堀）

グループ2：深鉢A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、C、浅鉢（町田堀～）

グループ3：深鉢B-2、B-3、C（下原・西原～）

6 考察

（1）中岳Ⅱ式土器の型式変化（第7図）

結果により分けることができた3つのグループについて、詳細を述べながら形態の変化について考察する。

グループ1：深鉢A-1、A-2、B-1、C、浅鉢・A-1、A-2、B-1といった肥厚しない口縁をもつグループである。

- ・深鉢A-1のように「く」の字状に曲がる口縁部に強い屈曲を持つ頸部、強く張り出す肩部といった鳥井原式と同じような器形をもつ土器が見られる。

- ・口径が胴部最大径よりも大きいものが多い。

- ・底部は平底。

- ・文様は凹線文が主体であり、凹点文を施すものもある。肩部に文様を施すものは少ない。

- ・調整は深鉢A-1、A-2、B-1、浅鉢には内外面ともに丁寧なミガキを施す。深鉢Cはナデ調整を施す。

- ・浅鉢は精製で薄手のものと、それを模倣したような粗雑で厚手のものがみられる。

グループ2：深鉢A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、C、浅鉢

- ・肥厚しない口縁（A-1、A-2、B-1）と肥厚する口縁（A-3、B-2）が混在するグループである。

・器形は深鉢A-2と同じであるが、口縁内面の段が浅くなり口縁外面が三角形に肥厚するA-3が出現する。

・底部は小平底～尖底へ。

・文様は沈線文が主体となり、連続凹点文や三日月文を施すものもある。肩部にも文様を施す。

・調整については、深鉢A、Bは内外面ともに丁寧なミガキを施すものと外面はミガキで内面はナデ調整を施すものがある。深鉢Cは内外面ともに丁寧なミガキを施す。

・グループ1と同じように薄手の浅鉢と厚手の浅鉢が伴う。連続凹点文を施すものもある。

グループ3：深鉢B-2、B-3、C

・B-2、B-3といった肥厚する口縁をもつグループである。

・グループ1、2と比較して、口縁部がさらに肥厚し、頸部の屈曲が弱く肩部の張り出しも弱くなる。口径と胴部最大径がほぼ等しくなる。

・底部は尖底のみとなる。

・文様は沈線が主体で、凹点文、連続凹点文、三日月文を施すものがある。肩部にも文様を施す。

・調整は内外面ともに丁寧なミガキを施す。

・浅鉢は共伴しない。

グループ1は三万田式～御領式に似た器形の土器が共伴しており、口縁部が肥厚しない土器が主体である。グループ2では口縁部が肥厚しないものと肥厚するものが混在する。グループ3では口縁部が肥厚するものが主体である。肩部の張り出しについては、グループ1一番強く張り出し、グループ2からグループ3へと弱くなっていく。底部については、グループ1が平底、グループ2が平底～小平底、グループ3が尖底になる。文様については、グループ1では凹線文が主体であり、グループ2・3では沈線文が主体となる。グループ1では凹点文を施すものが少量ある程度だが、グループ2・3では連続凹点文や三日月文を施すものが目立つ。グループ1・2では浅鉢が共伴するが、グループ3では共伴しない。

3グループの共伴関係及び型式変化から、1期（グループ1）→2期（グループ2）→3期（グループ3）と変遷することが考えられる。

1期から2期への変遷過程において、口縁部の肥厚化が始まり、形態のバリエーションが増える。また、凹線の沈線化が始まるとともに、連続凹点文や三日月文などの文様のバリエーションも出てくる。2期から3期への変遷過程においては、口縁部の肥厚、器形の屈曲の減少、底部の尖底化が進行し、形態のバリエーションがなくなる。また、浅鉢も共伴しなくなる。3期の深鉢B-3は深鉢B-2と器形がほぼ同じであるため、B-2とB-3に時期差は無い可能性がある。

1期は中九州系のような古い様相をもち、2期・3期は従来の中岳Ⅱ式のような新しい様相をもち、2期でバリエーションが増えるため明確に線引きすることはできないが、全体で見ると新旧関係があり、おおよそ1期を

中岳Ⅱ式古段階、2期・3期を中岳Ⅱ式新段階にわけることができる。

（2）従来研究との比較

本稿での型式分類を従来研究の型式分類に当てはめると以下ようになる

深鉢A-1：（幸泉分類）竹ノ内式段階

深鉢A-2：（桑畑分類）中岳Ⅱ-1型式、
（幸泉分類）東田式段階

深鉢A-3：（桑畑分類）中岳Ⅱ-2型式、
（幸泉分類）町田堀式段階

深鉢B-1：該当なし

深鉢B-2：（桑畑分類）中岳Ⅱ-3型式、
（幸泉分類）町田堀式段階

深鉢B-3：該当なし

深鉢C：（河口分類）中岳Ⅰ式

深鉢A-1は幸泉分類竹ノ内式段階に該当する。まだ口縁部が肥厚する前の段階であり、鳥井原式及び三万田式に器形が酷似する深鉢A-1の確認により、桑畑（桑畑1989）が指摘していた中九州系土器との関係性が確かなものとなった。

深鉢A-2は桑畑分類中岳Ⅱ-1型式・幸泉分類東田式段階に、深鉢A-3は桑畑分類中岳Ⅱ-2型式・幸泉分類町田堀式段階にそれぞれ対応する。先行研究においては時期差があるとされていたが、今回深鉢A-2と深鉢A-3が共伴することを確認した。

深鉢B-1は該当する型式がなく、深鉢B-2は桑畑分類中岳Ⅱ-3型式・幸泉分類町田堀式段階に対応する。深鉢B-1の確認により、深鉢B-1から深鉢B-2へ変遷することが明らかとなった。

深鉢B-3は従来研究では該当する型式がない。深鉢B-2と同じ器形なため、B-2と併存する可能性が考えられる。

深鉢Cは河口分類の中岳Ⅰ式に該当する。河口は中岳Ⅰ式を中岳Ⅱ式に先行する土器として設定したが、今回の結果から深鉢Cは全時期から出土しており、中岳Ⅰ式は中岳Ⅱ式と共伴することが判明した。

また浅鉢については、中岳Ⅱ式の深鉢に三万田式や御領式の浅鉢が伴う可能性があることを指摘されていた。浅鉢が伴うのは2期までであり、三万田式・御領式の浅鉢が伴う例は少なく、三万田式・御領式を模倣して作った浅鉢が伴う例が多いことがわかった。

（3）中岳Ⅱ式土器の位置づけ

ここでは今回の検討結果をまとめ、中岳Ⅱ式土器の位置づけを行う。

1期では口縁部が肥厚しない土器群が主体となり、三万田式～御領式に似た器形の土器と共伴している。頸部が強く屈曲し、肩部の張り出しも強い土器が多く、底部は平底である。2期になると口縁部が肥厚しない土器と肥厚する土器が混在するようになる。形態のバリエー

ションが1番多いのが2期である。3期になると口縁部が肥厚する土器群が主体となる。頸部の屈曲と肩部の張り出しが弱くなり、底部は尖底となる。

文様については、1期は凹線文主体で2期からは沈線文が主体となる。それに伴い、1期では凹点文を施すものが少量であるが、2期からは連続凹点文や三日月文を施すものが目立つようになる。

器種構成については、三万田式・御領式の浅鉢が伴う可能性が指摘されていた(桑畑1989)が、1期～2期において三万田式・御領式に似た精製浅鉢だけではなく、深鉢と同じく厚い器壁の浅鉢も共伴することがわかった。従来中岳Ⅱ式とされてきた土器と同じ器形をもつ深鉢Cが1～3期を共伴することも分かった。

従来の中岳Ⅱ式土器は、肥厚した口縁部を持ち、口縁部外面に2条の凹線又は沈線を有する深鉢形土器であるとされてきた。しかし今回の検討の結果、口縁部が肥厚しない土器と肥厚する土器、無文土器、浅鉢のように、中岳Ⅱ式の中にも多様なバリエーションが存在することが明らかになった。

また、嫁坂遺跡8号住居において深鉢Cが、中岳Ⅱ式と入佐式をつなぐような資料に共伴している。入佐式のC14年代は、中ノ原遺跡(鹿屋市)では 2940 ± 25 、諏訪前遺跡(南さつま市)では 2970 ± 85 となっており、いずれも中岳Ⅱ式の測定年代よりも新しい年代である。

以上のことから、中岳Ⅱ式は三万田式～御領式に併行し入佐式に先行することが考えられるため、縄文時代後期後葉に位置づけることが妥当である。

牧B遺跡出土の三万田式に推定される土器のC14年代が 3120 ± 20 年、深鉢B-2に分類される西原遺跡包含層出土土器のC14年代が 3120 ± 40 年とかなり近い数値となっている。そのため、第7図のような一連の形態変化が時期差によるものなのかは今後も検討が必要である。

7 おわりに

今回中岳Ⅱ式について再検討を行い、形態変化や器種構成の変化といった中岳Ⅱ式の全体像を把握することができた。しかし、薩摩半島や宮崎平野といった他地域との比較を行うことができなかった。薩摩半島においては中岳Ⅱ式と併行すると考えられている上加世田式が多数出土しており、中岳Ⅱ式との関係の解明が今後の課題として残る。また、AMS試料の不足測定試料の不足により、検証が不十分である部分もあるため、今後中岳Ⅱ式土器のさらなる資料数増加やAMS測定資料の増加に期待する。

本研究を進めていく上で、鹿児島県立埋蔵文化財センターの黒木梨絵氏には多くの貴重な御指導御助言をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

【引用・参考文献】

桑畑光博 1989「東南部九州におけるある縄文土器の型

式組列-中岳Ⅱ式土器の再検討-」『鹿児島考古』第23号
鹿児島県考古学会

幸泉満夫 2021「中岳系土器群の研究」『宮崎考古』第31号
宮崎県考古学会

水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究-九州から見た縄文文化の枠組み-』

宮地聡一郎 2008「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』アムプロポーション
鹿児島県立埋蔵文化財センター

1996『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(16)

2008『西原遺跡・牧ノ原B遺跡・原村Ⅰ遺跡・原村Ⅱ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(124)

2011『石縊遺跡・十三塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(164)

2017『山ノ口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(188)

2019『下原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(198)

2021『牧B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(207)

2021『原村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(208)
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2016『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(7)

2018『町田堀遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(20)

末吉町教育委員会 1980『中岳洞穴』

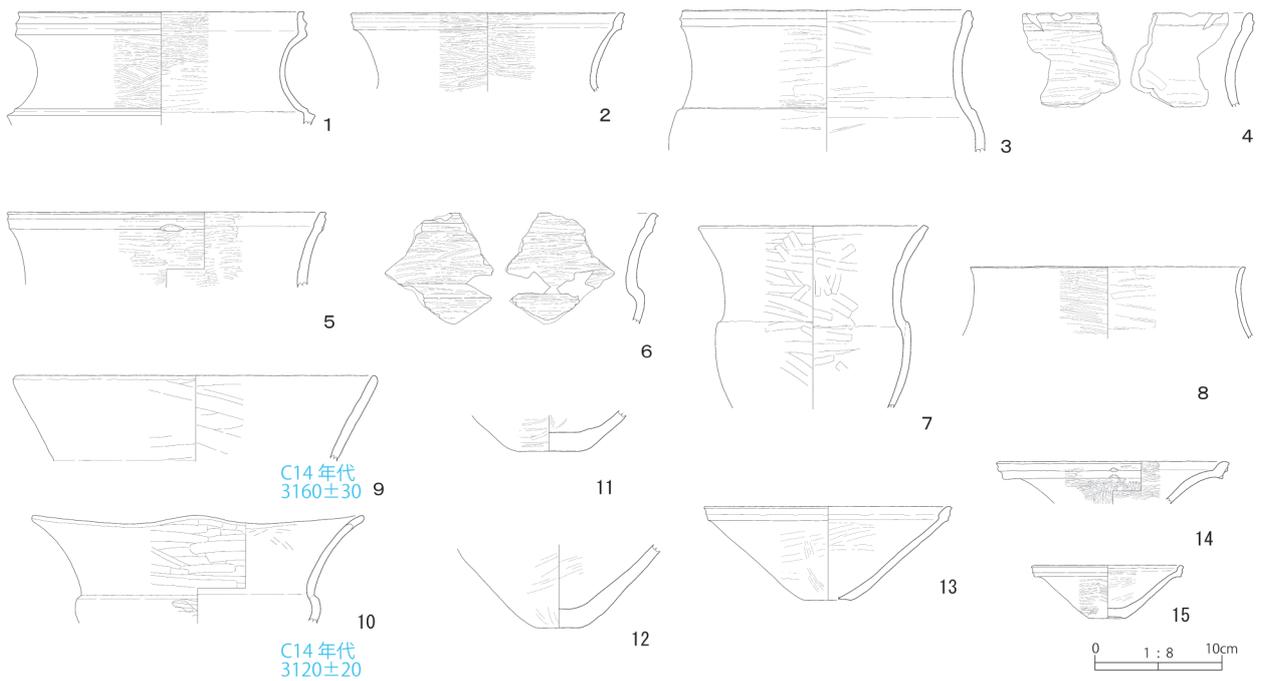
宮崎県教育委員会1985『浦田・入料・堂地西・平畑・堂地東・熊野原』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書(2)
宮崎県埋蔵文化財センター

2004『豊満大谷遺跡・野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)

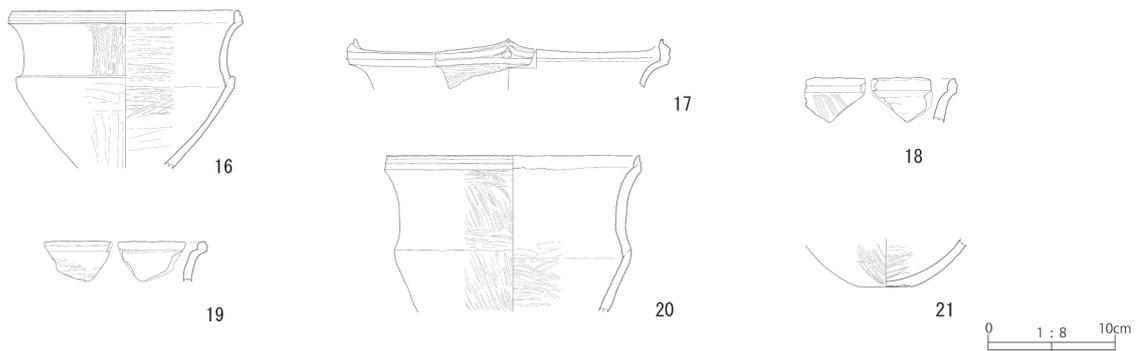
2019『嫁坂遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(249)

山田町教育委員会 1983『中村遺跡』山田町文化財調査報告書(1)

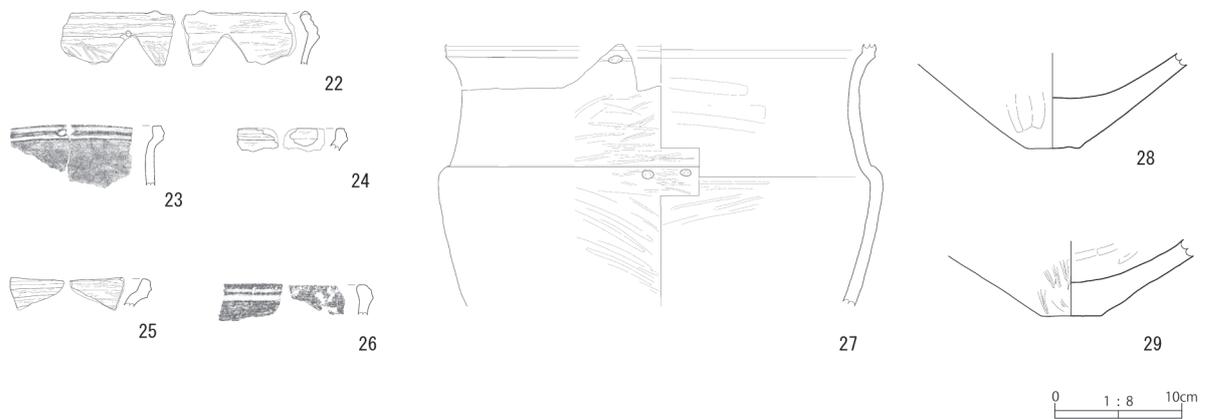
牧B遺跡 1号豎穴建物跡



原村遺跡 3号豎穴建物跡

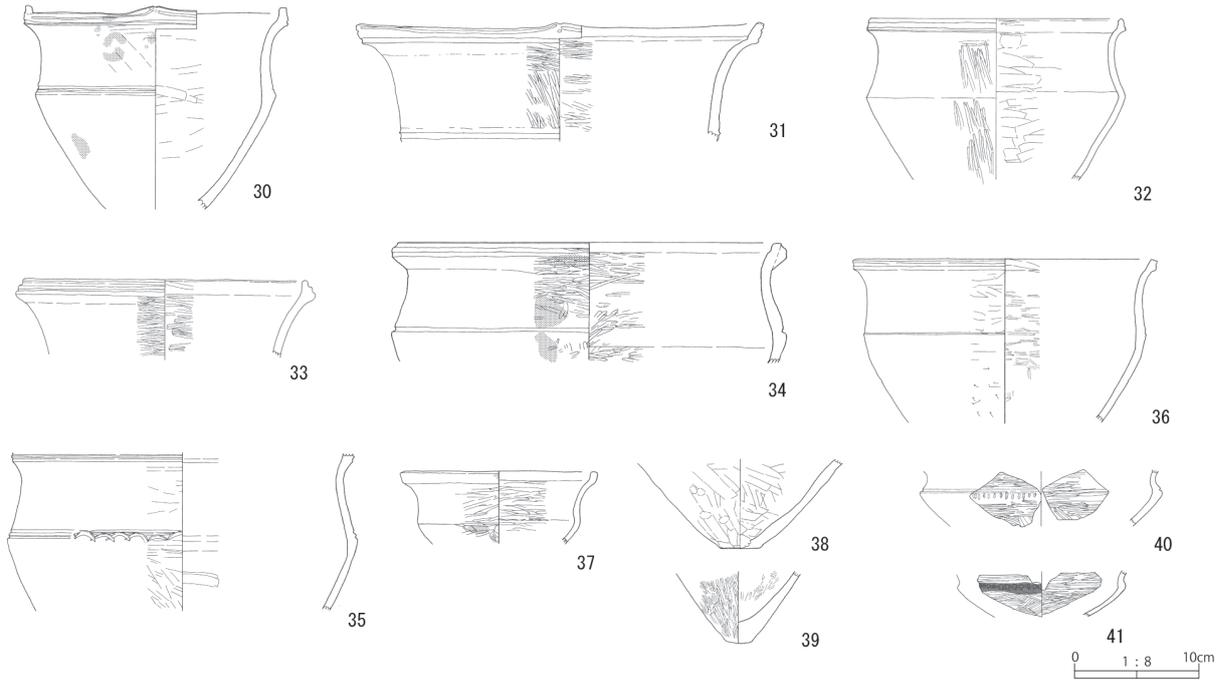


原村遺跡 4号豎穴建物跡

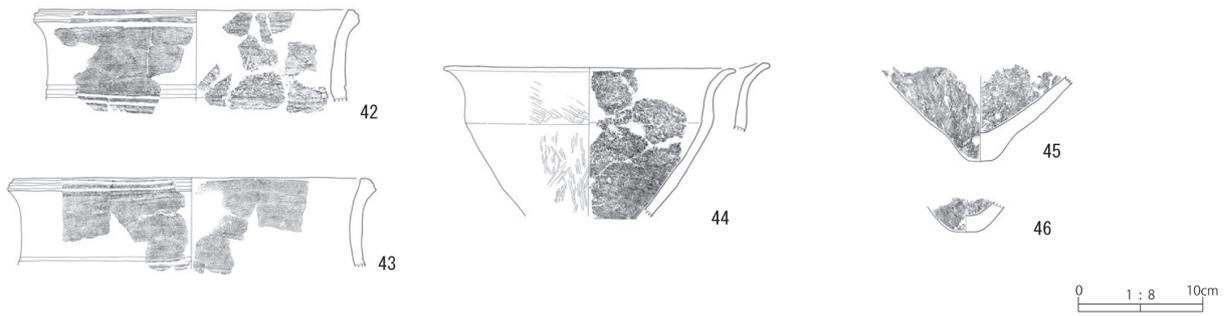


第4図 各遺跡出土遺物(1)

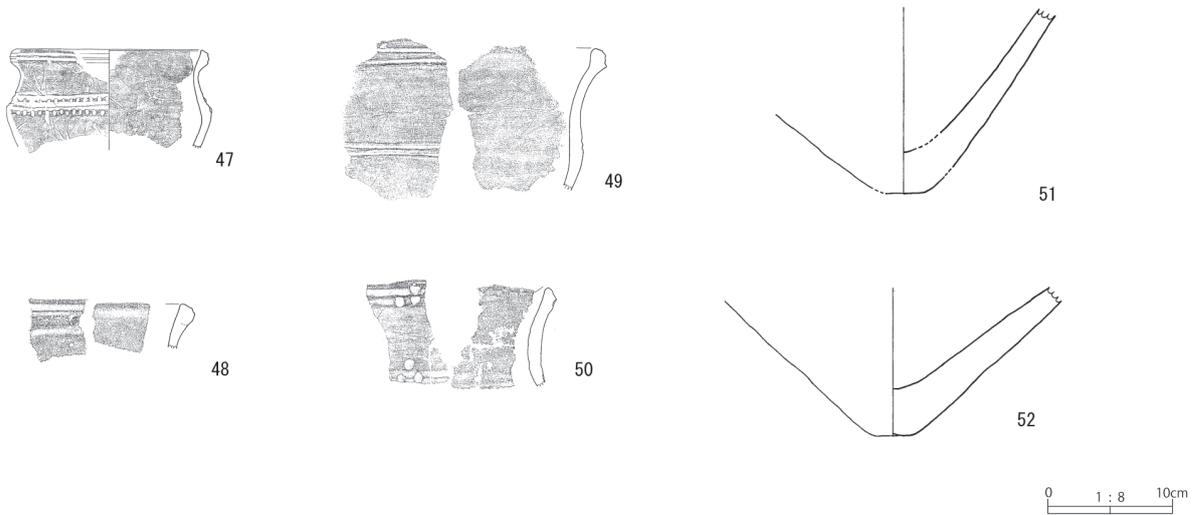
町田堀遺跡 1-1号 竪穴建物跡



下原遺跡 1号 竪穴建物跡

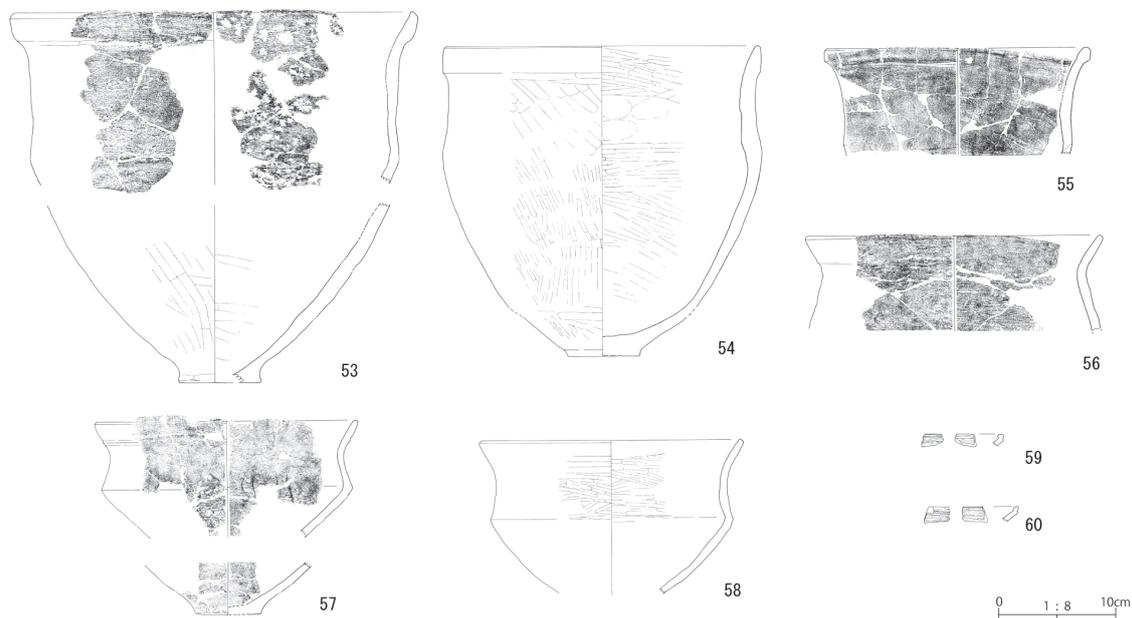


野添遺跡 1号 竪穴建物跡



第5図 各遺跡出土遺物(2)

嫁坂遺跡 8号竪穴建物跡



第6図 各遺跡出土遺物(3)

第2表 各遺跡一括資料共伴関係

		深鉢分類							底部			浅鉢	共伴遺物	
		A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	C	平底	小平底	尖底			
牧B	1号竪穴建物跡	○	○		○				○	○			○	磨製石斧, 磨石, 敲石, 軽石
原村	3号竪穴建物跡	○	○						○					打製石鏃
	4号竪穴建物跡	○	○						○					磨石
東田	竪穴建物跡	○	○										○	
平畑	SA1		○						○	○				打製石鏃, 石匙, 磨製石斧, 磨石, 砥石, 石錐, 勾玉
	SA54	○	○						○	○				打製石鏃, 敲石, 石錐
町田堀1	1号竪穴建物跡		○	○	○	○		○	○	○				打製石鏃, 打製石斧, 磨製石斧, 磨敲石, 石皿
	2号竪穴建物跡			○					○					土製品, 打製石斧, 磨製石斧, 磨敲石, 石皿, 石剣
	3号竪穴建物跡					○			○	○				磨敲石
	土坑6号	○							○	○				打製石斧, 磨敲石
	土坑21号	○			○									
	土坑22号		○											
	土坑24号		○							○				磨敲石
土坑27号	○													
土坑28号		○		○	○			○	○					打製石鏃, 打製石斧, 磨敲石, 石皿
町田堀2	1号竪穴建物跡		○	○				○	○	○				打製石鏃, 打製石斧, 磨敲石, 石皿
	2号竪穴建物跡		○	○		○		○	○					打製石斧, 石皿
	3号竪穴建物跡		○			○		○	○			○		打製石鏃, 打製石斧, 磨敲石, 石皿
	土坑9号	○				○			○					打製石斧
	2号掘立柱建物		○										○	打製石斧
	4号掘立柱建物	○	○						○				○	磨製石斧, 磨敲石, 軽石
5号掘立柱建物		○											磨敲石	
嫁坂	1号竪穴建物跡					○			○	○				
大浦	1号竪穴建物跡					○								
西原	竪穴建物跡								○					打製石鏃, 打製石斧, 磨石, 管玉
下原	1号竪穴建物跡					○		○		○				打製石鏃, 打製石斧
	2号竪穴建物跡					○				○				打製石鏃, 磨石
野添	1号竪穴建物跡									○	○			スクレイパー
	2号竪穴建物跡													スクレイパー
	3号竪穴建物跡											○		スクレイパー, 打製石斧, 磨敲石
	4号竪穴建物跡													管玉

<p>五段階</p>	<p>1 期</p>	<p>深鉢 A-1</p>	<p>深鉢 A-2</p>	<p>深鉢 B-1</p>	<p>深鉢 C</p>	<p>深鉢底部</p>	<p>浅鉢</p>
<p>新段階</p>	<p>2 期</p>	<p>深鉢 A-3</p>	<p>深鉢 B-2</p>	<p>深鉢 B-3</p>	<p>深鉢 B-3</p>	<p>深鉢底部</p>	<p>浅鉢</p>
<p>3 期</p>	<p> 坂B (深鉢1号: 1・9~11・29~37・53~55・65・66・81・82), 包含層: 78) 原村 (深鉢3号: 3・12・13・67, 深鉢4号: 2・14~17・68・69, 包含層: 78) 平畑 (SA54: 4・19・41・57・70), 東田 (深鉢: 18・83), 十三塚 (包含層: 56), 町田畑 (土坑6号: 6・59・88, 土坑21号: 5, 土坑27号: 7, 埋設2号: 43, 埋設4号: 8, 深鉢1号: 21・22・26・27・40・71・72・85~87, 深鉢3号20・89), 中岳 (包含層: 23・64) 西原 (深鉢: 24・44・75), 中村 (包含層: 28・62), 下原 (深鉢1号: 42・76・77, 包含層: 61), 塚坂 (深鉢1号: 47), 野添 (深鉢1号: 48~50・79・80, 深鉢2号: 51・52), 山ノ口 (包含層: 63) </p>						

第7図 中岳Ⅱ式の形態変化図 (S=1/20)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第15号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
